



門又6
號5756
卷2

文化十二年

十月

十一日

十二月



擁

手書

日記

二

Handwritten Japanese text in cursive style, including names like '田中' and '高田'.

三四年二月七日
高田早苗

Handwritten text in a cursive script, likely a diary or journal entry, covering the right page of the notebook.

十月 丁亥 大文化十二年

○朔日晴 伊勢曆よ。うづのえぬ。いつ。木。ハ。えん
のそ。の。の。の。天。おん。ま。こ。天。火。ら。う。ま。や。く。
と。ん。も。正。木。千。幹。が。も。く。浅。三。十。観。音。十。七
人。講。の。勸。化。錢。と。や。り。つ。

- 妻 辨 田中氏女 歳三十一
- 妹 千勢カ 歳三十一
- 長子 義木常藏 幽叔 歳十一
- 次男 高田幸次郎 歳九
- 全員の合計 銀廿五匁一人廿五匁宛なりと云

菊池相孫くきいのついでに未の
時より、秦其馨、河野政兵衛、山崎新次、
郎ちやうなどのおもむきよ、島崎得左郎、津
直ちかなどのおもむきよ、
しつあつむ、津直は相模国津久井、
縣根小屋村の名主。

○二日晴と叔も、
みまろりぬ、そのふらぐ、藤原彦磨、磐瀬
醒北川、真顔なまのぶ、おもとふ北、真言の
おもとふおもとふおもとふおもとふおもとふ

の神明、くまのぐいは午の時、ぐいし三田
の八幡、泉岳寺、れ四十七士の墓、高銀、妙
寺の大佛、おぢ、あゝ庚申、壺品川の妙
因寺、海月、観音、海晏寺、東海寺、など
るあぐいし、かつ、さ、田町の追方、えい
くしめ、三田、赤羽根、飯倉西の窟、虎の門
櫻田、和田、倉龍の口、神田橋、三川町を經
て、おもとふ、比は、おまの、の拍子木
おまの、おまの、おまの、おまの、おまの、
泉岳寺の考、盤木の沖より、やゝぬ、ぬ、

出づる海晏寺のしんもしんちき カキ 十
カイツラウゾウもみぢたる東海寺
おるおのころこれカゲよめるのめりた
るいづれを カキ 一と云ふはく
しぢく物 カキ 一と云ふはく
歌 カキ 一と云ふはく
ま カキ 一と云ふはく

○三日晴つより了阿法師 カキ 一と云ふはく
三代實録負親儀式曾丹集 カキ 一と云ふはく
知賢主の詩 カキ 一と云ふはく

由豆鼠が日用工夫集四巻を カキ 一と云ふはく
嶋崎律直未の付 カキ 一と云ふはく

○四日晴唐本屋庄 カキ 一と云ふはく
うり福基島子 カキ 一と云ふはく
澤露井長石川十右衛門 カキ 一と云ふはく
と カキ 一と云ふはく
と カキ 一と云ふはく

○五日晴嶋崎律直上条昌太郎親恵
海 カキ 一と云ふはく
駒山 カキ 一と云ふはく

追方なる諱土真宗西教寺に任備し
 宇奈根の里に荒居以謙がもとよりせり
 そとて柿落芋などあまのこおこり
 〇六日晴了阿法師まぐもく共よ三代實
 録貞觀儀式をくらう曾丹集をもよ
 ことく大田翠がもとよりせり
 橋千蔭と贈吾れ哥をちんかこやいりさ
 享和三のこ浪華の四珠
 契沖あざりのこづから桂を
 楓のちのをもとて木幸氏がお

くのそれそりあ
 珠のそれそりあ
 浪華の四珠
 桂あきのこ
 ちのこ
 のそれそりあ
 橋千蔭
 のそれそりあ
 のそれそりあ
 のそれそりあ

〆

千巻序

陰よりちみあふさるー 一えびをえ
なびしーいさうみよづき

と又あそびのれこーは火田草のあり
なり 嶋崎律直二度あそび

○七日雨知賢主のまじく使をやりあ和田
常七郎 松村吉平 藤井信五郎 鳥海
茶河野大助 古澤安子 長谷川十右衛
門 せいごうおととがよ

○八日晴知賢主のまじりさしこあ扶家

鐘銘自あをとおさるー 嶋崎律直高平
伊兵衛 なごまごよあ菊池桐孫 丑山 兼
話の九編をとらるー書馬書の出席をこら

○九日晴昨夜戌の時より南風いんげー
かりー今朝辰の時よりよ ちよ河野
大助 ぐー又やりつ 奉 眞 啓 活 ぶ ー ー ー
とー抄録かどさやー 嶋崎律直中
の時よりみまらるー家路よちよんれ
このきをとほぐ夜よ入て戌の時より南
御番所やけぬ南の町奉行 根岸肥前

守主病よあしこもこしこし此大のるが
はひよあもきこるふいじんちりゆん
○十日晴了阿法師磐瀬醒磐瀬百樹が
きこし例の隨筆 目錄を編輯も
從志海い未の対むうまきしあ申
のそつりよ河野大助よりよし
二冊え薬研堀の金鼠窟よあし
安兵衛とり料理屋よ酒けもの
あし舟よあし吉原中の町三浦屋
あし鳥屋とり侶梅よあしあし

しはあのつり対こりこり了阿磐瀬
醒磐瀬百樹親志海かこり
あしあしあし

○十一日了阿法師あしあしあし
筆一卷扶桑鐘銘集申下の二巻あし
あし今日古今四場居色競百人一首とり
秤書あしあしあしあしあしあし
あし百人の像あしあしあしあし
あしあしの歌あしあしあしあし
あしあしあしあしあしあしあし

言葉盡す産す四深云之干時 至酉正月日
とあり性急軒 四泥子序 頓作産四夏
産の波又云づのよのよの 阪野とあり三味
縁山下の鈍翁土脚よあんでと道樂軒よ
そいづとあり波しあり ○性急軒四泥子の
序 ^亭う丁よさうとふ物ぼつとあり ねいさや
仕のよとありくぐやさるよ子細うーくく
ま似きる 櫛ニニ足とありふ物ほく
物子細うーまかど今しよの伝活この
一の歌よ行 檮櫛 勘三郎 あやむをすト

こむすびのいけのまよ我のわさびのいけよ
あまうはくともあやむをすト かよよふふふの
よまうはくともあやむをすト ○オサの歌 ^サ山
と魚は魚れ山あめのをよ仕現のま
ーのまを ^サ櫛ニニ足とありふ物ほく
ま ^サう丁よさうとふ物ぼつとあり ねいさや
オサ一人目 ^サ宮崎 武部 保入のまをさうさ
しでうりあんとくまらつげをさるあやむ
保入のめい ^サの證 ○オサ一人目 ^サ片山 仁業
保入のまをさうさ ^サあやむをすト

屋より書画賣やし金百疋あんどんや
平由豆流村田子もよらうしやう
そこしぬ

○十四日曇ちよ入こ月すみこらうりり
太田屋のもよらうよびよおやこらざりぬ
酒よるひさ見こもよらうしはもよらも四
あえうちあぐこらこし

○十五日晴陰不定鳥海茶のぐもよら
永知うり文つのもん

○十六日晴素其馨うり文つのもん
紙印

日記をこらうし系升賣のし金百
疋あんどんやらぬもつ十七日書画賣
たしをせよら出席をとえらぬあぬ
く玉川の紅葉あんとんすの針た
うらよか

のぬれなもこらう
のぬれなもこらう

○廿二日雨ちかあもあつこのちあひぬ
世田谷旅行よき
みはもらう美の針むらうみ河野大助生

づきいぬまがし十の曲調出羽守主れ臣
上村直とこのついで宗皇帝の鷹の画一鋪
又もよあそも〜
そん替り

身彼雄鷹凡鳥芙蓉羽毛玉雪
目耀金星 翔冲霄漢 叩 威
闕庭燦之餘 潤智之峰 崑凡屬留
賢誰不怡情

益藩宗正萃山王源贊 □

ま

朝端時立振翔衣直欲摩天達
帝畿莫遣虞人張弋網高冲

豈向平原飛

東閣學士臣高轅贊 □

かゝるん毛箱の徽宗皇帝鷹之圖嘉慶
帝本孟秋徐舟舟書籤とありその直傳
はらり〜んと〜りが〜

○

北三日 宇由豆流が〜
雜談集と〜蒙抄ともあり〜大山郷
八が〜〜文つ〜申の付〜雨

むらあきしりーがはくまらんやいぬ

○廿四日晴藤原房大田軍一をどくもく
又や一つ磐瀬解磐瀬百樹片倉鶴陵
岸本由豆流ながきしりておきも子鳥海
茶の書思よしもあの日らまらあやみのほど
糸升翼がくろまきしり酒なごのいしり鶴陵
と由豆流はなやとびまきしりて推書後
まらあうしりまの付むりよあつりよ
○廿五日雨藤原房大田軍一を出雲
番歌合と神道問答ととおきしり余の批

評をこふ磐瀬離しやうそこしりて鑑別符
志をおこせしり弘賢主のしりて玉川和齋
唐紙の鑑紙をまるい石井増時鈴木助十
郎がわあつしり申の付むりよあつり太
田佐吉河野政兵衛素具齋かなごまを
とびまきしりて日のくまよあつりぬ
○廿六日晴岸本京三郎まごまぬ
○廿七日雨鳥海茶の書思よしもあつりぬ
○廿八日曇片倉鶴陵うしりてやうそこしり
推書梅の詩とおきしり龍登雲漢

書工の如く、又つういふ事とせば、
川師官人形町に住居する者、
かざりきのさいしんの股上、
かげんしんあ茶せんか、
時代をづー、
附高師のとりれの股上、
りづ、
一七、
ちり、
一、

云々、
たの、
七、
と、
か、
ど、
六、
今、
り、
上、
丁、

たの可なりしとよむるに...
あつて...
格とハ...
○同股子...
みえ...
○同巻...
坊...
○同巻...

倉の...
あ...
あ...
○同巻...
段...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

○大竹の町三町目築屋用板とある上下
二冊を一冊子合とせしむり紙多し序後
上下とも四十一丁あり

十一月 戊子 文化十二年

○朔日大雨おもしろくやまび壬午あやふ味
がく大さやう天おんう日かどしとよ木日
と伊勢曆子又お知賢主のももく後拾遺集
と狩野惟信の板子鶴の画一鋪とせしむりつ
太田寧がうさうそくして即曲撰要全部
南畝文稿一巻とせしむり

○二日晴知賢主のももりさうそくあり
了阿比師まげらんおももく三代實録と
西宮記とせしむりつ

○三日曇山川茂大夫まぐさのあまふて雨
 ○四日雨あまふてやしの知賢主の詩をききん
 ○五日曇山本由豆流北博言鳥海茶がらぶが
 了文やりつ小谷三思齊麻彦磨片倉元
 周がらぶまふめ

○六日晴知賢主のまぐさくやうそくし軍
 林宝鑑をかりつ自祐壬午江伯鹿の序あり
 上下二巻を一冊とす西国の刊本なりしと
 その刊行の年ころをききんし岸方中流
 ころしとふやりつ口のころし大木豊國

が家をもとて今日鳥海茶がらぶ
 管子周礼の書即抄佐野集がらぶと
 こやしき

○七日晴小谷三思まぐさあまふて
 子将野養川唯信のちよ鶴の掛留よ
 知賢主の母賢之の

こやしきのあまふのころしはまふあつと
 けのあまふとまふてふしと
 ちりつこのれ母賢之首あり
 まふつしあまふのちよまふより二句

寛光のくちやせり

○十二日曇天おふりつは月おあふまぬ
まじり平由豆流がうしあまこは喜成よま

ら

○十三日晴りよ持田のきとせ子のまの
きよしよあぬ嬉浪用談とりあれとよ
がりかえ

うもちほぐれまぬのぐりかえ
えんちかかかかかかかかかかかか

○十四日晴今日おぬのんちるまこま

あぬ島海まかまかかかかかかかか
よよよよよよよよよよよよよよよよ

○十五日曇松永自興島海まかかかかか
かりかかかかかかかかかかかかかか

○十六日村田のま子素野其聲がうせり
くくくくくくくくくくくくくくくく
原物多衛まかかかかかかかかかか
摩郡布田の石の駆長に平由流がまかか
かかかかかかかかかかかかかかかか

○十七日晴平由豆流がまかかかかかか

の美乎平二ををわつしまるふり平由
豆流ごもしり使あこせりつらよめて
古澤安子長石十右衛門があをよ
らよ

○廿二日晴弘賢主のもしくやうきこつて判
官物法と常死物法のみをきとてかいつ
平由豆流うしつるふりつ未の時より
深川 天巖寺中 柳谷の飲明彦宗まの
禪宗の善徳寺なりしよあゆめ今日は先
祖高田法右衛門友清朝臣の忌日なれば

なりし年輪をよむるよ下総国成田山の不動
尊常陸国安波の大杉大明神なりし付
糸の便をよむる古後摩利の初穂百正死
をよむるしよあゆめ

○廿三日晴平由豆流
部とあこせり萩原利中石井盛時な
らよめしよあゆめ

○廿四日晴木挽所河原崎唐の芝居をよ
まぬ横山町二丁目太田佐吉佐吉が妻千代
子娘町子をしよあゆめハ妻頼子妹千代

七丁目やげぬ富子時どろろりんは亭子骨が
あつていりやげぬ

○廿九日曇々正木千幹よりきて万葉集これ
名所の正字を走らんことをこひいふてや
つ京橋東白菓屋舗よりある松浦茂直
翁が剛子まなごんしを請へまうでせられ
てまゝよ了阿法師のきのだのものをと
子よまゝよといふ事したるし

十二月 己丑 大文化十二年

○朔日晴辛亥とづ神より大やう天おんち
日金田なるより伊勢曆よりあ嶋嶋律道よ
でもぬ

○二日晴村田のきおか子まうでくお河津
清がここの歌をいふもいふもいふ湯嶋
天神よまうでく妻越坂の伊勢力徳がありよ
いふよ古澤安よがありよがひてのくこは
あかすり

○三日晴山崎新次郎河野政兵衛石川勘

ふしとちの過船會所ありさるの頭人金七
とせしちの過船會所ありさるの頭人金七
あて松原とせしちの過船會所ありさるの頭人金七
雨とせしちの過船會所ありさるの頭人金七

○十一日雨あつて晴ありやけのついでに
此會所の預徳次郎よりあるせうと己の附
せうと駕よげしあつ鳩を名の果とを
けるよ白田とせしちの過船會所ありさるの頭人金七

川の名の茶屋よりひいてまの會所預金
七とせしちの過船會所ありさるの頭人金七
昨日船瀬のしりやう骨屋屋の新板二
舟とせしちの過船會所ありさるの頭人金七
れ上よあり武田源次郎
とせしちの過船會所ありさるの頭人金七

○十二日晴太田佐吉妻具聲吉澤安子

とがたひしとちん

○十九日晴あるちけいとくく、所命所をも
己の時をうりまきとづ堰村よこのなりく
くりの舟茂のなまをやくまのこくく山口新
田村の田中よ見沼の田本竹の跡、んきし四
もく泥中よくつちりあまよーち七ととく
そのまのこくく竹のあくく一尺二寸を
うりよこなぬま青いあくく今よりは
百年もくうくちりものなまよまのまの色を
よめるな 松崎村にいよーち、

かつりぬ

○十九日晴浅草観音へまじりて、まらぬを
て放生しつかつきのぬど正木千幹太田佐
吉かどのちんをよ北慎言やうそこして
老人雑話二冊おこやう

○廿日晴知賢主のちんよて撰片三抄をよむ
今日はおまじりまづこざりしうば萩原政之
とちんよ會業しとくつ島海老かきしと

○廿一日晴製瀬醒がちんよすしとく

詔新をあらしり 弘賢主よ雪の故に
あつげんまゝらん 奉其馨まげまの神
田明神よまゝしりてかたよ古升露升
がくえりつ

○廿二日晴 弘賢主よ雪の故に奉其
憲朝臣のあしり水戸あすの日本紀一冊を
あまの山駐度の藩臣若田三郎
小侯七郎 杉本 貞右衛門がくしり
奉孫よ丞岸本 由豆流 船瀬 醒りしり
しりり 由豆流 後 櫻標 ぼ

○廿三日晴 石川 勘太夫 蓮日 和

田常七郎 善徳寺 沢木 豊国 がくしり
しりり 奉のあしりしりり 了阿法師 平
由豆流 岸本 京三郎 がくしり
乙 杉浦 茂 直まてまの日本紀をま

○廿四日晴 河野 大助 うりしりり

○廿五日晴 岸本 京三郎 鳥海 景 奉其
馨なましりしりり 小侯七郎 がくしり
りり

○廿六日曇 己の對をうりりり 雪のりりり

さうせんとしや
おろなくんいほちさう
不ゆるまて片やりの
井坂島義の聖堂下
の若お屋より歌の會や
よおやとく道は
ささかりゆん

あやまのこのきんこ
あやまのこのきんこ
あやまのこのきんこ

○廿七日晴素
素君聲高う
位着の例をとて
やうめあひひま
まぐまるとひひま
まぐ

○廿八日晴
平由流菊池桐陰

○廿九日曇
上茶只太郎
吉澤

茂宣など
村田のいせ
あつち
やうそこ
こせいつ
えらつる
孝阿
游清が
画賛の歌
をとて
やりつ
萩あつち
のあ
はるあ

○晦日曇
時不定
花より
こて
明星
まら

井坂島義が
つと
のそら
あけ
つと
のそら
あけ

Handwritten text in a cursive script, oriented vertically on the right page of the notebook. The text is difficult to decipher due to the cursive style and fading, but appears to be a single line of writing.

